

近畿大学附属豊岡高等学校
進学探究コース

ダンスを
通じたい
探究活動
報告書



DANSTORK

近畿大学附属豊岡高等学校
進学探究コース

ダンスを通じた 探究活動

報告書

- 02 はじめに
- 03 プロジェクト概要
 - 企画趣旨・目的
 - 会場・対象・実施体制
 - ダンスの取り組みについて
- 06 関係者たちの想い
 - 豊岡市担当者からのコメント
 - 担任の先生たちにインタビュー
 - 地域の方々との関わりについて
 - アドバイザーの方からの声
- 14 生徒たちの反応
 - プロジェクトを終えた生徒たちの言葉
 - 担当教員の言葉
- 16 アンケート調査による
ダンスを用いた探究学習の成果測定
- 18 座談会
- 23 アーティストプロフィール
- 24 取材記事
- 28 おわりに



はじめに

豊岡というまちで、私たちダンストークが活動している理由。それはそれぞれのフィールドで熱い想いをもってこの地域に生きる「人」に魅了され、一緒にこのまちで働きたいと強く感じたからです。高校生の彼らが将来このまちにいる私たちのことを思い出し「一緒に働きたいな」と帰ってきてくれるかどうかは分かりませんが、私たちにできることは、彼らに地域の魅力を伝えること。そしてこれからの人生を楽しく生きていく為にきっと役に立つ、自己肯定感・表現力・想像力・創造力・コミュニケーション力を育むこと。そんな2つの目的を軸に高校生が地域の大人たちと出会いダンス作品づくりに挑戦するという新しい探究学習のプログラムが2018年にスタートしました。近畿大学附属豊岡高等学校×豊岡市環境経済課×ダンストークという【学校・行政・専門団体】が協働で取り組んだ全国的にも稀有な事例です。

この3年間を通して、彼らは私たちに『ダンスの力』を教えてくださいました。「地域の方々によるこんでほしい」「感謝の気持ちを伝えたい」など、言葉では表し難いような想いや感覚をダンスという表現手法をつかって、めいっぱい全身で伝えようとする彼らの姿はその場にいた多くの人々の心を動かしました。そこには「人はなぜ踊るのか」という根源性を見ることができたようにも思います。

地域の方々と関わり合いながらゼロから地域の中で作品の素材を探し、試行錯誤を重ねて仲間と一緒に誰かのために作品づくりや発表に取り組んだ経験が彼らの糧となり、今後人生のさまざまな場面で彼らを勇気づけてくれることを願っています。

一般社団法人ダンストーク代表
千代 その子

プロジェクト概要

企画趣旨

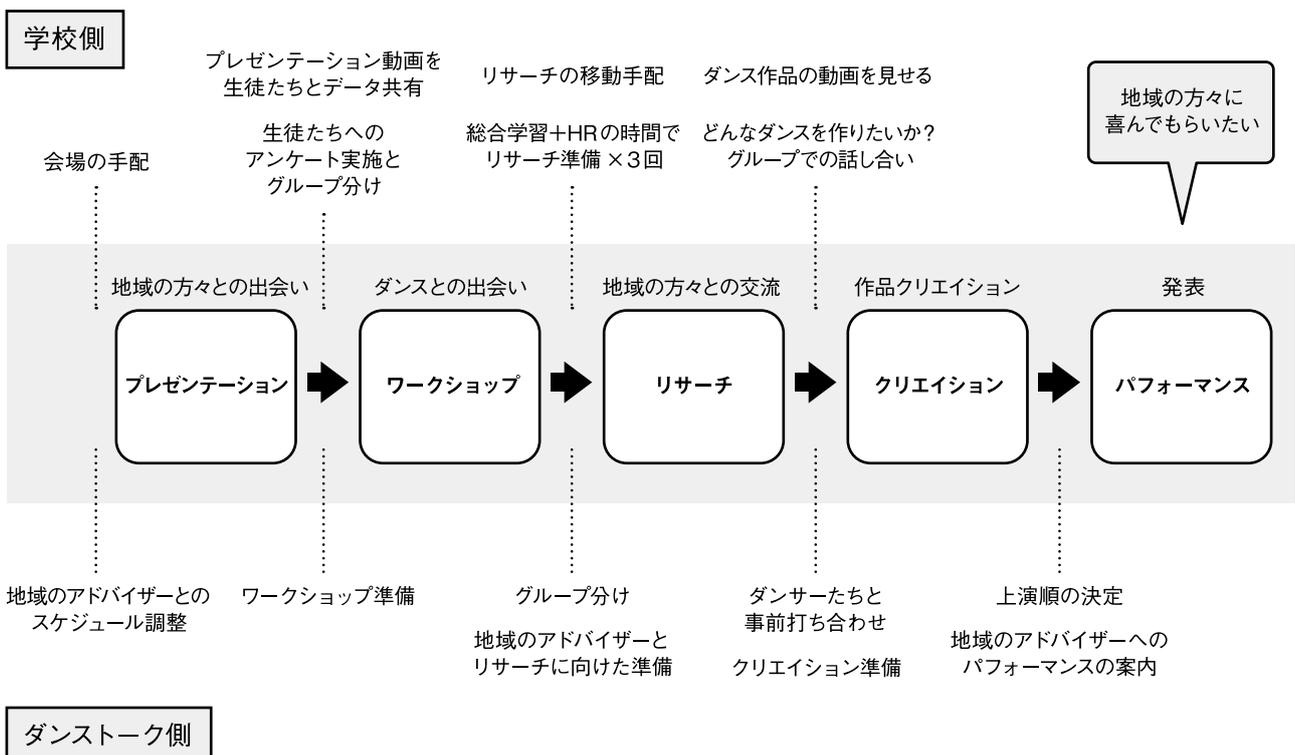
近畿大学附属豊岡高等学校の進学探究コース1年生が、“豊岡のまち”について探究し、地域で働く大人の想いに触れ、何もないところから仲間と協力して一つのダンス作品を創り上げることで、表現力・想像力・創造力・コミュニケーション力の豊かな人材を育成する。

目的

本プロジェクトは主に下記の2点を目的としている。

- 1) 地域の魅力を発見し、現場に関わる地域の人々の想いに触れること
→ 豊岡市への興味や愛着の醸成・Uターン就職を目指す
- 2) 個としての意見・考えを持つ、表現力・想像力・創造力・コミュニケーション力の豊かな人材を育てること
→ ダンス作品という“正解のない”ゴールを目指すプロセスの中で、一人一人がアイデアや考えを持ち(自己肯定感)、仲間と共有し(表現力・コミュニケーション力)、チームとして一つのダンス作品を創作する(想像力・創造力)

2020年度のタイムライン



会場

近畿大学附属豊岡高等学校（豊岡市戸牧100）
武道場、体育館、ACTルームほか
但馬文教府（豊岡市妙楽寺41-1）

対象

進学探究コース 1年生

2018年度：73名

2019年度：86名

2020年度：83名

実施体制

■2018年度

担当教員：中嶋徹、紀氏隆典、山根亘弘、塩崎統夫

豊岡市担当者：宮垣均

メインアーティスト：千代その子

サブアーティスト：渋谷陽菜

アシスタント：谷垣優

コーディネーター：橋本麻希

■2019年度

教員：中嶋徹、平野賢一、塩崎統夫、古閑祐治

豊岡市担当者：石田依子

メインアーティスト：千代その子

サブアーティスト：米澤百奈、石田安俊

アシスタント：谷垣優

コーディネーター：橋本麻希

サポーター：山本真紀

■2020年度

教員：中嶋徹、石田展一、寺谷信人、後藤一美、山口恭史

豊岡市担当者：石田依子

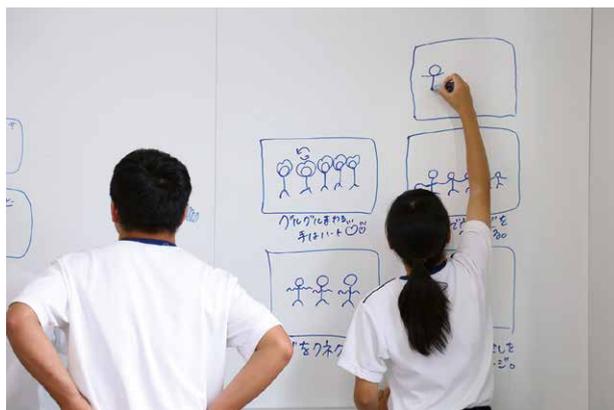
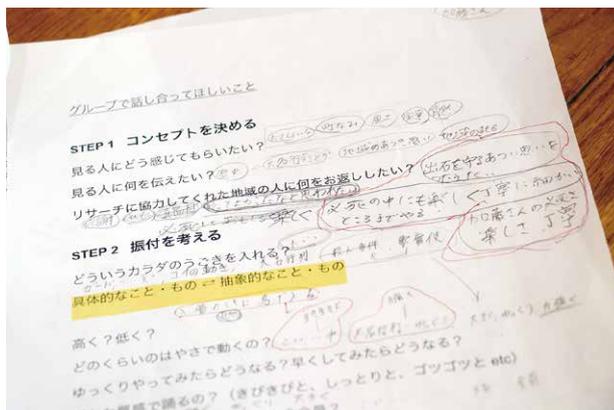
メインアーティスト：千代その子

サブアーティスト：米澤百奈、出川晋

アシスタント：谷垣優

コーディネーター：橋本麻希

サポーター：中根恵梨、松元雅俊



ダンスの取り組みについて (2020年度の場合)

ゼロから“なにか”を生み出す、その経験を得るために本プログラムでは『ダンス』を取り入れています。ここでいう『ダンス』は既存の振付を真似ることではなく、高校生たち一人一人の身体・アイデア・想像力から生まれるオリジナルの『ダンス』です。「誰もがダンスをつくり踊ることができる」という考え方を軸に、さまざまなダンスジャンルを取り入れて挑んだクリエイションの過程を記録します。

■アドバイザーによるプレゼンテーション

地域の10名のアドバイザーによるプレゼンテーションをおこない、終了後に生徒たちへのアンケートを実施。アドバイザーごとに5~10名のグループに分かれました。

■出会いのダンスワークショップ

メインアーティストと高校生たちの「出会いのダンスワークショップ」を各クラス約3時間ずつ実施。一人一人の個性・身体性・反応などを観察しながら進行し、終盤には簡単なクリエイション及び発表をおこないました。今回の取り組みの重要な要素である「周囲と話し合いながらダンスを創作すること」「観客の前でダンスを発表すること」の体験を目的としました。

■地域へのリサーチ

各グループごとに地域のアドバイザーを訪問する1日。感じたことや聞いたことなどを記録するためのリサーチシートを持参し、「印象」「音・リズム」「ものがたり」「動き」「かたち・手触り」「味・におい」の項目別に随時メモをとりながらインタビューや見学をおこないました。

■クリエイション

最終日の発表で地域のアドバイザーに喜んでもらえるようなダンス作品をつくることを目標に「コンセプト」「振付」「構成」のステップで、アーティストのアドバイスを得ながら段階的にグループ内での作品づくりを進めていきました。グループの進行状況に合わせて、順次リハーサルを実施。舞台上でのリハーサルは各グループそれぞれのタイミングでできるように申告制とし、高校生たちの自主性を育むことを目指しました。

<1日目>

| | |
|-------------|--------------|
| 8:45 | 会場入り |
| 9:30~10:30 | ウォームアップ |
| 10:30~12:00 | 作品のコンセプトを考える |
| 12:00~13:00 | 休憩 |
| 13:00~14:30 | 振付を考える |
| 14:30~15:30 | 構成を考える |

<2日目>

| | |
|-------------|-----------------|
| 8:45 | 会場入り |
| 9:15~10:00 | ウォームアップ |
| 10:00~12:00 | クリエイション/順次リハーサル |
| 12:00~13:00 | 休憩 |
| 13:00~15:00 | リハーサル |

■発表 (パフォーマンス)

発表当日、舞台上では各グループ10分間ずつの最終リハーサルを行い、その他のグループは設営やタイトル幕の作成等、会場の準備を行いました。地域の方々を観客に迎え、約5分間×10作品の本番を終えた後は「歓談タイム」とし直接感想を聞くなどの自由な交流の時間を設けました。

| | |
|-------------|------------------|
| 8:45 | 会場入り |
| 9:15~10:00 | ウォームアップ |
| 10:00~12:00 | リハーサル (各グループ10分) |
| 12:00~12:30 | プリセット |
| 12:30~13:00 | 開場 |
| 13:00~14:30 | 発表 (途中休憩あり) |
| 14:30~15:00 | 歓談タイム |

今回のダンスの取り組みを通して、高校生たちには「グループ内における自分の役割を見つけること」「目標に向かって互いの意見を交えながら自分たちだけのオリジナルの“答え”を見つけること」が求められていました。いかに能動的に一人一人が個として自分の意見やアイデアを発信し、自分たちの置かれている状況を楽しみ活かすことができるかによって、グループごとにクリエイションの進み具合に差が生まれたことが印象的でした。メンバー全員がリサーチを通して感じたこと・特に印象に残っていることを見つけ出し、作品のテーマを決めるプロセスには時間がかかりましたが、とても重要な作業になりました。美しい迷路のような旅館、穏やかな風景などの「言葉では伝えきれない地域の魅力」はダンスでしか表現できないことだったように感じています。

関係者たちの想い

宮垣 均さん

豊岡市 環境経済部 環境経済課 定住促進係
(2018年担当)

このプログラムは、『生徒に豊岡のことを学びながら、大学や社会で必要になる力を身に付けてもらいたい』という先生の思いと、ダンストークが培ってきたダンスの力があって、「ダンス×まち×教育」の授業としてスタートしました。

先生たちにすれば、ダンスの力をにわかには信じ難かったと思います。初めは、単に面白そうということだったかもしれません。

しかし、戸惑いや不安を持ちながらも、それぞれの思いを出し合い、やり方や役割を話し合いながら、プログラムを進めていきました。

生徒の皆さんにも戸惑いや不安はもちろんあったでしょう。

高校1年生の6月という、まだ互いをよく知らない時期に取り組んだワークショップから、まちのリサーチ、創作、最後のダンスで表現するという発表の場まで、照れながらも真剣に取り組んでくれました。先生も、生徒に交じり、率先して身体を使って表現し、生徒たちを盛り上げていただきました。

生徒たちは、このプログラムを通じて「まちを知る。まちの人と関わる」ということについて、知識ではなく、感性と身体でまちを知り、まちの人と関わりを持ってくれたように思います。創作してくれたダンスは、そんな身体的な体験を経て、小さい頃から育ってきたまちの記憶や、そこから感じる感情的なものまでが表現されていたと感じました。初めてダンスを創ったとは思えないほど、素晴らしいクオリティでした。この経験が、生徒たちのこれからの人生に、どう影響するのかはまだまだわかりません。しかし、まだ十分に言語化できていない取組みに価値を見出し、挑戦していただいた学校、先生方、そしてダンストークの皆さんには感謝しかありません。

また、このプログラムが3年間続けられたのは、関わってくださった多くの地域の皆さんのお陰でもあります。これからもプログラムが続いていくことを願っています。



石田 依子さん

豊岡市役所 環境経済部 環境経済課 定住促進係
(2019～2020年担当)

豊岡市ではUターン促進事業の一環で、地域との関わりが少ない高校生に地域について知るきっかけを作り、豊岡の魅力や可能性に気付いてもらう取り組みを市内の各高校で実施しています。近畿大学附属豊岡高等学校では、ダンスと地域探究を結びつけるユニークな授業を実施し、今年で3年目になります。過去のブラッシュアップを経た今年の授業では、地域サポーターと学生が授業を通してお互いを知ること、学生だけでなく地域サポーターにとっても地域への愛着醸成につながるようになりました。

過去2年間の授業と3年目の授業の大きな違いは地域の方たちとの関わり具合です。今回、地域を知ることよりも地域に住む“人”を知ることにはフォーカスを当てたため、学生たちも地域の方々も授業の主旨や目的が明確だったように思います。

また、担当者としてこのプロジェクトに関わり、ダンスが持つ「人の心を動かす力」を体感することができました。プロジェクトの担当になった2年目、学生たちがステージ上で全力でパフォーマンスをしていた光景が今でも心に残っています。見る人によっては辛辣な意見もあったので、ダンスを創作するプロセスを知っていたからこそ刺さったものがあったとは思いますが、練習の時とは全く違う体の動きや表情、そして一人ひとりがどうすれば良いパフォーマンスになるか真剣にダンスと向き合っていた姿に感動しました。そして3年目の今年は、2年目と比べ学生たちの様子を見る機会は減ってしまいましたが、学生たちの地域サポーターたちに向けた思いや感情が彼らのダンスからひしひしと伝わり、本番では思わず涙が出てしまう程学生たちのパフォーマンスに心を打たれました。

パフォーマンス当日初めて学生たちと対面した方々も含め、高校生たちのダンスを見ていた大人全員が「感動した」と話しており、言葉を使わずに思いや感情を表現することの力強さを体感すると同時に、ダンスを通じた探究活動というプロジェクト自体が地域の魅力になり得ると感じました。



担任の先生たちにインタビュー

このプログラムは、近畿大学附属豊岡高等学校（以下、近高）の先生方との連携が必要不可欠です。進学探究コース・コース部長である中嶋徹先生をはじめ、進学探究コースのクラス担任の先生方が果たしてくださった役割も多くありました。今回、3年の節目ということもあり、高校生たちを間近で見守っていた担任の先生方に、本プログラムをどのように受け止め、アーティストと向き合おうとされたのか、お話を伺いました。

先生がダンスと向き合った3年

記：川那辺香乃

「高校でのダンスプログラムのリサーチに関わってほしい」とダンストークから相談があったのは、2020年の夏頃。プログラムの中身を聞いていると地域、学校、アーティストと豊岡のあらゆる分野の多種多様な方たちが関わっていた。そのなかでも、今回は何人かの先生にインタビューを行うことで、先生方のダンスという初めての取り組みに対する戸惑いや試行錯誤、そして生徒への熱い想いを知ることができた。

在学中の今、豊岡でできること

このプログラムが始まった頃の話を知っていると、近高とダンストークの地域に対する想いのピントがうまく重なった瞬間があったと感じる。

近高は、2018年から「総合的な学習の時間」に一層力を入れ、とくに進学探究コースにおいては勉強以外にも様々な経験を生徒に提供したいと考えていた。そこには「彼らが卒業後、一度豊岡から離れても、いつかまた戻ってきてほしい。そのためにも、在学中の今、豊岡のことを知ってほしい」「地域のことを知るだけでなく、地域でいろんな考え方もち活動している大人と関わってほしい」という想いがあった。この頃は、ちょうどダンストークも法人化し本格的に活動を始めようとしていた時期である。当時の担任の先生は、豊岡市の担当者からダンストークの話を知り「まずダンスと聞いて、純粹に面白そうと思いました。そしてダンスで豊岡のことを盛り上げようとしている方がいるんだったら、そのチャレンジに生徒達も関わらせほしいと感じました」と語っている。

プログラムを通して生まれた発見・感動・戸惑い

想いのピントが重なっていても、とんとん拍子に進むことはあまりない。生徒だけでなく、どの先生もダンスに触れる機会はこれまでの人生でほとんどなかったと言っている。そうした不安があっても、先生方はワークショップを体験する生徒たちの表情をみて「この子にこんな一面があるんだ」という新しい発見や「お前、普段そんな事せえへんやん！」という嬉しさを感じたという。生徒たちがいろいろなアイデアを提案していく様子を見て「この子たちはすごい」と改めて確信する瞬間もあったそうだ。生徒の様子をみて、安堵する先生もおられたことだろう。しかし、必ずしもすべての生徒が楽しかったとはいえない。人前で踊るなんて恥ずかしいという気持ちが強く、最後までダンスをつくり、発表することに抵抗があった生徒もいたという。「地域をダンスで表現すること」は、このプログラムの独自性ではあると認めてはいても、なかなか生徒に「なぜダンスなのか」が説明しづらく、先生自身も理解し難いという厳しい意見もあった。

また、地域リサーチのスケジュールが荒削りで、もどかしく感じたことがあったという。生徒がほとんど質問することができないままリサーチが終了する場面にも遭遇したという話もあった。

しかし、年を追うごとに地域アドバイザーが積極的にプログラムに関わるようになり、ダンストーク側もリサーチ方法をブラッシュアップしていった。3年目になると担任の先生たちもインタビューの方法を生徒たちが学べるよう、事前に準備を進めてくださった。話を聞いていると3年という月日をかけて、ダンストークと学校の役割分担が自然と生まれていったように感じる。「豊岡は、子どもたちを育てよう、郷土愛を育てようという、すごく良い雰囲気のあるまちだ」という先生もいた。

なにもないところからつくり出す

このプログラムには、さまざまな要素が含まれている。「自分のまちを再発見する、貴重な学びの機会」と捉える方もいた。そのなかでも「これは正解・不正解がないなかでものをつくるという、おもしろい体験ができるプログラムだ」と発言された方の言葉を以下に抜き出してみる。

「これから大人になる子どもたちになにを伝えたいか、どんな力を育ててほしいかと考えたとき、自分で探究し、なにもないところからつくり出すことのできる力ではないかと思うんです。普通の授業だと、答えがあるもの、道筋があるものばかりなので、そういうものでない物事と向き合ったときにどうなるのか。最終的には、今の子は教えたことをやるだけじゃだめだという時代に入っている。私たちも、高校生が自らなにかを探して、自分たちでつくってほしいんだけど、学校のカリキュラムの中だとなかなかそうならない。このプログラムは学校の中からは生まれえないものだと思います。それがうまく入っていくことでプラスの面が生まれてきたと感じます」

互いに問い合うこと、その先へ

そのほかにも、多くの先生が少し照れたように「(アートは)正解がないものだと分かっているけど、生徒に口を出してしまいそうだった」「(リサーチ時のワークシートを)もっとしっかり書いてこいと言いついそうになるのをぐっと我慢した」というような発言もあった。

私は、先生自身もダンスに触れることに戸惑い、そして「教師」としてどのように関わればいいのかをずっと自問自答していたことに感動した。しかし同時に、ダンスが敷居の高いものと感じる方がまだまだおられることにも気づかせられた。このプログラムに限ったことではないが、アート作品を目にしたとき、どんな人でも慣れていないとそこで自分の気持ちを素直に伝えることは難しい。それはアートに関わる側の態度の問題でもある。今後はぜひ気軽にアーティストやダンストークのスタッフに聞いてみてほしい。アーティストは「こう感じた」「こう考えた」という言葉を絶対に待っている。そして同じように悩んでいる。

しかし、3年目には積極的に意見を言ってくれる先生もいたのであまり心配していない。今回のインタビューを通して、なにかあっても互いに忌憚なく問い合うことのできる素地が3年の月日を経て、竹野の砂浜のようにきれいに整ってきたように感じる。

今、大学受験を控えている3年生の生徒の中には、面接指導の際に、このプログラムでの体験を話す生徒が多いそうだ。「将来は、地域のために豊岡市役所で働きたい」という生徒や、「地域を活性化するための活動がしたい」という生徒もいるという。このプログラムを通して、今の私たちでは想像できない、大きな未来を描く大人が増えてくれることを願っている。

地域の方々との関わりについて

豊岡のまちを題材に、まちのことを探究し、何も無いところから自分たちでダンス作品を創り、発表するという課題に取り組むこのプロジェクト。

開始当初、先生方から「豊岡の高校生たちは家族や学校の先生以外の大人に出会う機会が非常に限られている」という課題を聞き、高校卒業後都市部へ出ていく人が多い地域だからこそ、在学中に地域の大人と出会う機会をつくる必要性を感じました。そこで高校生が地域を訪問し地域の大人と出会う【リサーチ】を行うことにしました。

1・2年目は手探りのなか、温泉・コウノトリなどダンスのテーマ別に高校生がグループを編成し、様々な現場で働く地域の大人を訪問してお話を伺い、ダンスの素材を集める【リサーチ】を実施。

地域の大人と出会う機会を作ることはできましたが、まちのことやインタビューする方についての事前学習の時間を設定できなかったため、ただでさえ地域の大人と話す機会のない高校生たちが、初対面の方を前に何をどう話せばいいのか戸惑い、上手く話せないグループも。地域の方々からも、「ダンスをつくる」ために一体何を話せば良いのかと戸惑いの声がありました。

振り返れば1・2年目は、このプロジェクトが目的とする、“高校生がダンスをつくるという正解のない課題に取り組む過程で地域の方々に関わることにより、豊岡のまちへの愛着を育て、自分の考えを持ち、表現力・想像力・創造力・コミュニケーション力を育てることを目的としている”ということ、地域の方々とは明確に共有することができずにいました。

2年目終了後に、プロジェクトの意義について地域の方々話し合う機会があり、「豊岡に将来戻ってきたいと思ったとき頼りになるような存在になるためには、(私たち)地域の大人が高校生たちの創作過程にもっと時間をかけて関わるべきだ」という言葉を地域の方々からいただきました。今以上の負担を地域の方々に強いることはできないと考えていた私たちにとって、想定外のありがたい提案でした。

その言葉を胸に3年目は、豊岡で特色ある活動をされている10名の地域の方々に高校生の創作に伴走する役割として【アドバイザー】をお願いしました。まずは高校生たちが【アドバイザー】のことを知るためのプレゼンテーションを実施し、もう一度話を聞きたい人を高校生たちが選び、グループ分けを行いました。

高校生は【アドバイザー】と交流・相談しながらダンスの素材を集める【リサーチ】を経て、グループ毎にダンス作品を創作しました。【リサーチ】は、【アドバイザー】の人間味と個性が溢れる時間となり、共に時間を過ごす中で、高校生と【アドバイザー】の距離が縮まっていくのを目の当たりにしました。

【アドバイザー】には発表にも立ち会っていただくことを必須とし、当日はリサーチの日に生徒たちが出会った地域の方々も来場してくださいました。

これは豊岡というまちで地域の大人たちが大きなチームとなり、高校生をゆるやかにみんなで育てる場をつくるという挑戦でもあります。

赤浦毅さん

株式会社出石まちづくり公社 統括課長

出石の観光関連業者で働いている私は、12年前にこの但馬に越してきました。奥さんの郷が豊岡市出石町で、子育てするなら“都会”よりも“暮らしやすい田舎”かな！と安直な気分で移住を始めました。暮らし始めると“都会よりも不便”なところが“心地いい時間”になり、人口も少なくコミュニティが小さいほうが、町人の知り合いが増え情報を共有できることに気づかされ、今では“田舎の方が暮らしは豊か”と感じています。

今回地元の高校生と関わりを持たせていただき感じたことは、この但馬に住む子どもたちの“当たり前の暮らし”は日本の古き良き人情のある暮らしの中で育まれた“日本の原風景”のようだと感じました。但馬の子どもたちがそれに気が付くには少し時間がかかりますが、いつか外から見た時に「地元はいいな！安心するな！」と感じてもらえるように、我々大人が子どもたちをしっかりと見届けていきたいと思います。

この度は貴重な体験をさせていただき、関わった皆様に感謝しています。ありがとうございました。

佐竹節夫さん・永瀬倭大さん

ハチゴロウの戸島湿地

高校生の皆さんがハチゴロウの戸島湿地にリサーチに来られた時、コウノトリの生態や歴史など、いろいろな分野について、真面目に話を聞かれました。ただ、内容が多岐にわたるため、どのようにダンスの表現へと昇華させるのか、受け入れ側も不安でしたし、生徒の皆さんも迷われたと思います。

当日、実際にダンスを拝見した時には、そんな不安は消し飛び、演じた内容に驚きました。コウノトリが歩んだ歴史から生態までを上手にまとめられ、見事という言葉がぴったりなダンスであると感じました。

生徒の皆さんには、今後正解のない課題が立ちはだかる事や、先が見えない状況に陥る事があるかもしれません。そんな時には、今回の経験を思い出し、挑戦する勇気のきっかけにしていいただければ幸いです。

太田博章さん

おおたユニフォームセンター店主

静かな中にも秘めたる思いを持つ5人の男子高校生。10月29日のリサーチの際に初めて顔を合わせ、お互いのことを少しずつ話し出していくにつれ、徐々に垣間見える彼らの心の内。「なんとなく僕と似ているところがある子ばかりだ」、そんなことをおぼろげに感じながら、ともに過ごしたりサーチの時間。11月12日、発表の日。彼らがダンスのテーマとして掲げたのは『つながり』。ビートルズの曲にあわせ、架空のカバンを順に手渡していきながらそれぞれの心の内にある何かをダンスで表現する。DJ、ギター、パントマイム、微笑ましくも胸が熱くなる、不思議な感情に見舞われた。心の中にあるものを誰かに向け表現する。この経験はこれからの彼らの人生のどこかできっと役に立つ時が来る。素晴らしい機会をありがとうございました。

小川祐章さん

温泉寺住職

3年目のプロジェクトに参加させていただいての感想は、生徒さんに関わる地域の大人としての責任の重大さと、それ故に共感を得られた時の大きな喜びです。

地域の文化や職業などをリサーチして、ダンスとして表現する面白い取り組みとっていた1年目。作品作りの為にはより深く、地域の文化や人と関わりを持つ必要があり、地域の世代間交流のきっかけともなる取り組みと意義を感じた2年目。

そして主催者側も運営側も参加者も互いに理解を深めた3年目。地域との交流のみではなく、地域に生きる個と交流し、そこで得た情報と同時に個人への思いもが表現された作品は、人間愛と生徒個々の感情に溢れていてすべてが素晴らしいもので驚きました。

これほど有意義なプロジェクトが、高校生に提供されている贅沢さを羨ましくすら感じつつ、地域に生きる大人としての責任の重大さを感じさせていただきました。最後にこのプロジェクトが、地域の懸け橋となり、高校生の生きる力の一助となるように定着することを祈念して、感想と感謝にかえさせていただきます。

加藤勉さん

出石の町並みガイド

このダンス授業の話をいただいたとき、正直出石の町とダンス？と思いました。

事前の15分の生徒の皆様の前で話をさせていただいた時、何をお伝えすればいいのかなーと思い、出石なら「どん底から這い上がった町」として住民が町を守り育てたことを皆様にお伝えしようという気持ちでした。はたして現地研修に何人の生徒さんが来ていただけるのか？不安でしたが10名来ていただき、つたない話にもかかわらず熱心に聴いていただき感謝でした。はたしてこれがどうダンスにして表現されるのかと思いながら発表会に行かせていただきました。

関係した生徒さんの順番が来ると、自分が発表しないのにドキドキ！何から入るのかと思っていたら「大名行列の奴」！やられたと思うと同時に「人」の繋がり力を表現されたと感動すら覚えました。このダンス授業に感謝！感謝！です。

片岡大介さん

三木屋代表取締役／NPO法人本と温泉

私は城崎温泉で三木屋という旅館を経営しており、若手の旅館仲間と共に文学で街おこしをするためのNPO法人本と温泉を立ち上げて活動しています。今回は本と温泉の一員としてこの企画に参加させていただきました。

ダンス発表は、温泉の空気感や本に対して感じたことがよく表現されており、またチームでよくコミュニケーションをとって作られたことが伝わってくる素晴らしい内容でした。そして私個人に対してもうれしいメッセージをいただきました。今回の企画に参加するに当たって、果たして授業の一環として成り立つような内容の話や時間を自分が提供出来るのか不安を感じていたので、とても感動し、関わる事が出来て本当に良かったと感じました。貴重な体験をさせていただきありがとうございました。

柴田良馬さん

但馬屋代表取締役

「今の豊岡の子どもたちは家族と先生とコンビニの店員以外、大人と関わる機会がないんです」関係者の方から聞いたこの話には私は衝撃を受けました。その状況を改善するために本プログラムが大きな役割を担っていることを知り、高校生たちが未来に繋がる「何か」を掴むお手伝いが出来るのならと思いアドバイザーを務めさせていただきました。

当初は、「ダンスじゃなくても良いのでは」そう思っていました。今はダンスであったからこそ本プログラムの成功があったのだと確信しています。ダンスには明確な正解がありません。生徒たちは各アドバイザーから得た「ヒント」を頼りに、試行錯誤しながら自由な感性で制作活動に励みます。「ヒント」に込められたメッセージを生徒たちなりに解釈し、「表現する」「伝える」ということの難しさを学んでいきます。そして、制作過程の中で問題を解決し、作品として発表する。その成長した姿は私たちに大きな感動を与えてくれました。この感動をたくさんの方々に味わっていただきたい。そして、地元の子どもたちには、より多くの大人たちと関わることのできる環境を与えてあげたいと強く感じさせてくれるプログラムでした。

伊木 翔さん

豊岡劇場 現場責任者

生徒たちが自分たちで調べ、考え、話し合い、創り出す。その現場を少しでも共有できたことで、私も刺激を受けました。見えない障壁を少なからず抱えながら生きる子どもたちにとって「自由な発想」が難しい現代社会だと感じています。そんな中で、この授業がもたらす影響は小さくないはず。普段、接点のない高校生と関わる事ができたのも良い機会になりました。生徒たちも地域の大人と関わる機会が少ないと思うので、そういった意味でも意義のあるものを感じています。私の勤務する豊岡劇場を含め、豊岡地域の資源となる場所・もの・ひとに関わることのできる素晴らしい取り組みなので、今後も継続してほしいと願っています。

服部恵山さん

豊岡市立竹野子ども体験村村長

豊岡市竹野町の魅力は何といっても「自然の豊かさ」と「海のキレイさ」があり、それらの恵を生業とし、人が集う「旅宿」がたくさんある「田舎の小さな海町」です。山陰海岸ジオパーク内にあり、環境省が定める国立公園内に位置しており兵庫県最北端の町としても知られています。また明治時代から残るまち並みには迷路のように広がる路地裏と約60件程の民宿があります。

竹野チームの皆さんには、まち歩きガイドで観光協会会長の青山さんと町を散策したり、旅宿のオーナーでゲストハウスを営む石丸さんや、移住定住の促進に尽力されている小谷さん、そして海や自然環境を活かした施設竹野子ども体験村での体験の様子を見学したり意見交換をするなど、「自然」や「旅宿」をテーマに散策をし、五感を通じてまちを感じていただきました。

発表当日、皆さんにお会いしたとき最初は緊張した様子も垣間見えましたが、ダンスが始まると自然を全身で感じたおかげか皆さんの表情にも笑顔いっぱいだったのが印象的でした。

海岸で見上げた青い空に飛ぶ鳶。

海の中でお話しし合う魚。

のんびりゆらゆら揺れる海藻。

風景は同じ時間・場所であっても季節・天候や観る人の心境によってさまざまな表情をみせますが、生徒の皆さんが自らが選んだ地域に足を運び、五感を最大限に使って感じた事を、表現されている姿はとても印象的でした。竹野で聴こえてくる音も表現されていて竹野浜に流れるゆったりとした時間や空気感が伝わってき、まるでミュージカルを観ているかのようでした。竹野に来た事がない人にも連想できるようなダンスはとても素晴らしかったです。またぜひ竹野に遊び来てくださいね！

中嶋由紀さん

一般社団法人ワンノート豊岡／中嶋由紀ピアノ教室

プログラム3年目となる2020年度、女性のアドバイザーにもというお誘いを頂き参加しました。ピアニストという仕事柄、拠点にしている場所が特にないので、高校生にどのような体験をさせてあげることが出来るか、そもそも私でいいのか、と実際に会うまでは頭を悩ませましたが、事務所兼経営しているカフェでの時間は普段の素顔が見られる楽しい時間となりました。6名の生徒さんがそれぞれ興味を持った楽器で、皆が夢中になって練習する姿と、それを機にグループが親密な空気となってお互いの緊張が溶け普通の話が出来たことが何より印象的です。

後のアンケートで、我々大人が素敵な時間を過ごしてもらえるか心配したのと同じように、子どもたちはグループの普段話したことの無い人達と過ごすことや、我々に会う事に対して緊張していたのだと当たり前事に気が付き、その時間があつたからこそダンスを皆で話し合っ創作出来たのだと改めて感じます。

ダンスはなかなか思うような形が見つからずに創作は難航したと聞いていましたが、発表当日は力まずに彼等らしい空気感を持った独特の雰囲気（見ているこちらは思わず力が入ってしまいました）、この企画と彼等に関われた事がとても誇らしい。

今後も色々試行錯誤されながら続けていって欲しいと思います。

生徒たちの反応

プロジェクトを終えた生徒たちの言葉

【プロジェクト終了後の気持ち】

- 地域の人とタメ口で話せるくらい仲良くなって、また遊びに行きたいと思いました。
- やりきった感がすごいです。直前までは緊張で心臓バクバク、動きカチカチでした。でも、終わったら力が抜けました。頑張った感がすごいです。
- 町をダンスで表そうと言われて難しいなと思ったけど、班で徐々に結束力が強まり、将来に一步繋がったような気がしました。
- 新型コロナウイルスの影響で、みんなで何かをする機会がすごく少なかった中でコミュニティダンスの取り組みで正直気分はのりませんでした。でもリサーチに行ってみて、すごく新鮮で楽しかったです。それをダンスにするのはすごく難しかったし、尺や構成や音楽をどうしようかとチームのみんなと考えるのはすごく充実していました。誰かと何かをつくるのがすごく良いことだと実感できました。
- 最初は振付なんて出来ないと思っていたけど、考え始めると楽しくて、どうやったら伝わりやすくなるのか、チームのみんなと話してアイデアを出し合って、それを繋げて行って完成した時はうれしかったです。
- 最初はイメージがわからなかったし不安だったけど、ダンスを披露してみたくさんの人に褒めてもらえて、頑張っただけでよかったし達成感がありました。自分たちの班が伝えようとした人以外の人にも「感動した～」と言われて、人から人へ想いが伝わるのを感じました。
- 街の魅力を言葉ではなく身体で他の人に伝えるのはとても苦労したし手こずった。豊岡の方々はあたたかい方ばかりだった。
- すごい疲れたけど、達成感は半端じゃなかった！創作するのは難しかったけど、友達とたくさん考えることができたのは楽しかったです。ダンス未経験なりに多くの人を感動させることができたのでとてもうれしかった。
- 疲れたけどやってよかったと思う。チームでのコミュニケーションもとれたし、何より人の心を動かすことができてうれしかった。
- 最初は「簡単そうで楽しそう」と思っていました。でも、

いざ自分たちで一からつくるぞとなった時、頭の中には何も浮かばず、挫けそうになるくらい難しいものでした。何かを表現するという事はこんなに難しい事なんだと思いました。大人に腹が立つ事もあったけど、最後はそれを忘れるくらい感動したし、最高の作品になって嬉しかったです。チームのみんなにも、先生方や講師の方々にも感謝しています。

- 人が人を束ねて、その先へ向かわせるという行為の難しさを身にしみて感じた。人よりも何かを考えたり、人と共同して何かを完成させること。着々と何かの段階を踏んでいく過程に美しさを感じたような気も。コロナ禍のせいか、人と人の距離があり、まとめるのも話をするのも難しかった。それでもやりがいを感じることができたのは発表の日でした。良い経験をしました。関わってくれた皆様には感謝しています。
- 何よりも感じたのは達成感です。初日が荒れに荒れたからです。振付は思い浮かばないし、まとめることもできませんでした。今思い返せば、よくダンスが出来たものだと思います。全体的に見れば疲労したに違いないのに、達成感と共に感じたのは幸せでもありました。素晴らしい体験、お金よりも価値のある思い出です。きっと数年後も思い出す度、幸せを感じられると思います。
- 振り返ってみれば、とても良い時間で楽しかったです。チームが団結して一からダンスをつくる事はとても難しい事だと感じました。本番ではとても緊張したけど、やり終えた時の達成感はなかなか感じる事の出来ないものでした。
- 最初は何をしたら良いのか全く分からなくて、早く終わらないかなと思っていました。でも、段々ダンスが出来上がってきて、みんなで練習して踊るうちにすごく楽しいと思いました。終わった今では、まだ続けたいという気持ちがあるくらいとても楽しく、貴重な経験になったので本当に良かったと思いました。
- 見に来てくださった方々が「感動した」「ありがとう」と明るい言葉をかけてくれて良かった。難しいなと感じる時もあったけど、完成した時の達成感が気持ちよかったです。

【後輩に向けてのアドバイス】

- 恥ずかしいと思うけど、一生懸命やったらカッコいい。
- 例えグループの中に異性がいても、どんどん話しかけていった方が早く終わって余裕ができるし、仲良くなれると思う。
- 「こんなダンスでいいの？」と思うかもしれませんが、何一つ心配はいらないです。そんなダンスでも良いと思うし、色んなことを体験できるはずです。その体験を是非ダンスにして下さい。
- やるならやるで、しっかり楽しんだら良いと思う。
- 班での結束力、積極性は大事だと思いました。時間が短く、一人が怠けると時間に負けちゃうので、協力してやってほしいと思います。
- 難しいことは考えず、自分の思うままに動いてほしい。
- 沢山考えて、沢山悩め！
- 思っている以上に身近にダンスの材料はあるから、頑張してほしい。
- 自分の為になることが多いから、真面目に聞く所は真面目にして、ふざけて良い所はふざけて、切り替えをつけて学んでいけば良いと思う。
- リサーチをする時に見るだけでなく、肌で感じてほしい。その土地の感じや地域の人、教えてくれる人の思いなどを感じてほしい。
- クラスも男女も混ぜこぜで、最初はうまく話せないと思うけど、積極的に自分から話した方が良い。ダンスを踊るのは恥ずかしいと思うかもしれないけど、ネガティブじゃなくて、楽しむということを考えたら良いと思います。
- 全力で取り組むこと。一人一人が意見を出すこと。周りをよく見て行動すること。コミュニティダンスをする前と後の自分の心の変化や人として成長したことに気がつくこと。
- 話し合っただけだと何も始まらないので、動いてみることを。
- 積極的に意見を言う。楽しんだもん勝ち。表現はわかりやすく大きくする。
- 苦勞してほしい、と伝えたいです。考えて考えて汗を垂らしてまで取り組んでほしいです。それを終えた先には、素晴らしいとしか言いようのない感動があります。なんとなく、そういった大人との繋がりや会話が、人間の中にある光の一部であると感じられました。
- 全力でやって後悔はないと思う。
- しっかりとリサーチをして、表現豊かに楽しく踊ること。
- 見ている人に「何を伝えたいか」をよく考えること。自分の意見をはっきり言うこと。
- 積極的に行動や発言をして、思い切ってやってみること。
- いろんな人が自分たちがダンスをつくってどんな事を表現するのか楽しみにしていると言うこと。いろんな人が協力してくれているということ。表現の仕方は色々あるということ。
- みんなで助け合っただけで一つの大きなものを創り上げる事は大変だけどそれ以上に達成感が大きいし、多くの人たちを喜ばせることができるという事を伝えたいです。

■ 担当教員の言葉

但馬の高校生たちは素直で真面目な子が多く、大人に従順だが、果たしてそのまま大人になっていいのかと思っていました。自分の思いや考えを表現し慣れていない生徒たちに、社会で生きていくのに必要な力を付ける経験もさせたいと考えていました。そこで、コミュニティダンスのお話を伺い、興味をもちました。

我々教師は『正解』を引き出そうとしてしまいがちですが、ダンスの創作には正解も間違いもなく、一人ひとりの表現力・創造力を引き出し、0から創り出すプロセスが最も重要です。これまでに生徒たちが表現したものはどの作品も素晴らしく、達成感や自己肯定感を高めることのできる貴重な体験となっています。

豊岡市は『ふるさと教育』を熱心に取り組んでいますが、高校は大学進学を勧めても、地域へ戻ってくるような働きかけはあまりできていなかったと思います。高校生たちの目線で地域の魅力に気づき、出会った大人たちの熱い思いやこだわりに触れる。そんな中での人とのつながりはこの地に対する可能性と安堵感を生み、将来のUターン就職につながると信じています。そして、きっと但馬を盛り上げてくれる大人となってくれることと期待しています。

中嶋 徹

進学探究コース・コース部長

アンケート調査による

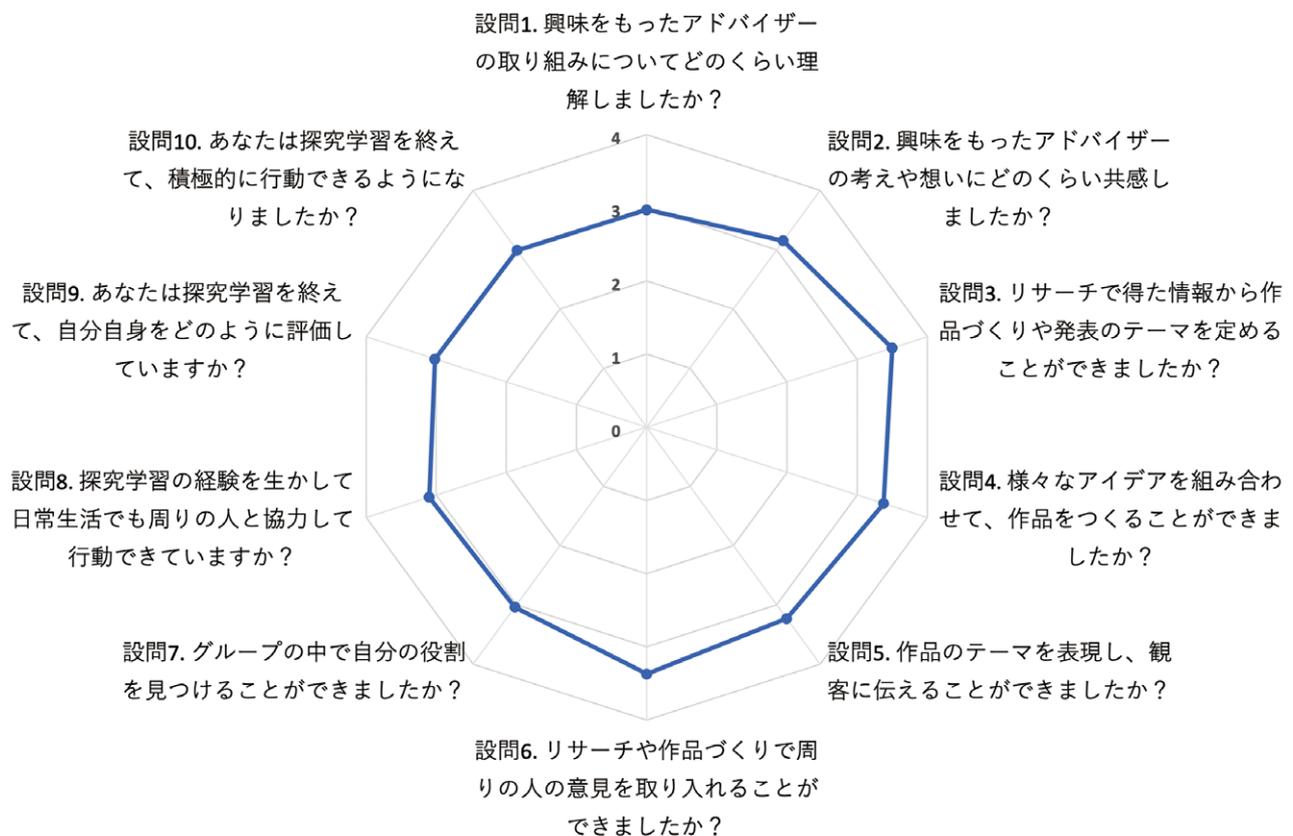
ダンスを用いた探究学習の成果測定^{*1}

1. 評価の目的と方法

ダンスを用いた探究学習は、その取り組みや発表内容について地域アドバイザーや最終発表会の観覧者、関係者からの高い評価を受けているものの、生徒自身がプログラムを通じて身につけたスキルや、文化芸術を用いた教育プログラムにおける成果（アウトカム）についての定量的評価はこれまでなされてこなかった。また、文化芸術を用いた教育プログラムの定量的評価は、海外のアート・インテグレーション教育²や鑑賞学習における評価の試みがなされているが、地域リサーチをもとに舞台芸術の手法を用いて表現する教育プログラムの評価については実績が乏しく、手法の開発が待たれている。

本調査では、ルーブリックを用いたアンケート調査によって、探究学習を通じて生徒が身につけたスキルや成果の数値化を試みる。ルーブリックは、学習目標の達成度を判断するため、「評価の観点（規準）」と、「観点の尺度を数段階に分けて文章（記述語）で示した評価の基準」から構成されるマトリックス（評価表）を用いる。数値化やテスト等による評価が難しい取り組みの成果やスキル修得の度合いを測ることができ、今回のような文化芸術を用いた教育プログラムの評価測定に適していると考えた。プログラム終了後に、受講生徒に対してweb上でのアンケート調査を実施（回答数：73）し、回答内容について分析を加えた。

2. アンケート調査の結果



3. アンケート結果から読み取れること

今回のアンケートは、①課題基礎力(リサーチ、クリエイション)、②対人基礎力(チームワーク)、③対自己基礎力、の3つのカテゴリ、計10問に加えて、④地域理解・愛着に関する自由記述の1問、計11問からなっている。

①課題基礎力については、地域アドバイザーへのリサーチに関する設問(1,2)に比べて、クリエイションに関する設問(3,4,5)の自己評価が高くなっている。本アンケート調査の設計において企図したアート教育におけるクリエイションのステップ「読み取り」、「翻訳」、「統合」の内、翻訳(テーマ化)と統合(組み合わせ、表現)の数値が比較的高い。この事から、ダンスを用いた地域学習を通じて生徒が創造的なプロセスを経験し、地域の魅力を身体を使った表現として発表しえたことを自己の成果として認識していることが伺える。

②の対人基礎力に関する設問からは、クリエイション中には協働的な取り組みができてきているものの、それが事後まで継続できているかは生徒によって評価が分かれている。③の対自己基礎力に関しては、探究学習による経験が日常の行動や自信に結びついているかは、性別によるバラつきが大きい。

自由記述である設問11では、「地域を活性化しようという地域の方々の熱い思いがすごいと感じた」や「自分が知らないだけで、色々な人が地域のために一生懸命になってなにか貢献しているところ」など、アドバイザーを通じて地域社会とのつながりや地元愛を認識する生徒が大多数であった。また、「取り組みを通してじゃないと知ることが出来なかったものがいっぱいあったこと」など探究活動の枠組みについての記述が見られた。

4. 今後に向けて

ここでは、アンケート結果で値の低い項目に着目して改善策を提案する。「課題基礎力」では、設問1が他の項目に比べると値が少し低くなっている。改善策として、生徒自身が理解を深めたと認識し、実感できる機会を増やすことが考えられる。「対人基礎力」では、設問7の評価にバラつきがあり、値が低くなっているため、探究活動の途中で自分の役割を確かめる機会を設けることで改善が期待される。「対自己基礎力」においては、他の結果に比べると値が低くなるが、生徒が成長してゆくなかで、ここでの活動が成長の糧となることを期待したい。また、探究学習の開始前にもアンケートを取得することで、学習を通じた生徒の各種スキルの形成について測ることが可能になるため、今後の課題として検討したい。

*1 この調査は、一般社団法人ダンストーク、龍谷大学ユネスソーシャルビジネスリサーチセンター、総合地球環境学研究所研究基盤国際センターコミュニケーション部門の協力のもと、2020年度本プロジェクトに参加した高校生を対象に実施しました。

*2 アートの手法を通じて学びを重ね、表現する、教育の方法。生徒は、アートの手法と他の科目を結びつける創造的なプロセスに取り組み、双方の科目でより高度な学習目標を達成することを目指す。(John F. Kennedy Center for the Performing Arts, <https://www.kennedy-center.org/>)

並木 州太郎

龍谷大学ユネスソーシャルビジネスリサーチセンター

龍谷大学ユネスソーシャルビジネスリサーチセンター、京都大学経営管理大学院・研究員。専門は、地域経済学、地域経済政策。欧州の地域経済・地域政策の研究に加え、ビジネス的な手法を用いて社会課題を解決する社会的企業(ソーシャルビジネス)の研究および起業家育成、地域社会への実装化に取り組んでいる。

三村 豊

総合地球環境学研究所・研究基盤国際センター

総合地球環境学研究所・研究員。専門は、建築学(建築・都市史)、環境芸術学。インドネシアのジャカルタ都市圏では地理情報システムや画像処理を用いて建造環境の特性や都市の歴史の変遷、土地利用の変化に関する研究、日本の中山間地域(京都・高知)では、地域資源の記録と保存、その活用に関する研究に取り組んでいる。

宗田 勝也

総合地球環境学研究所・研究基盤国際センター

総合地球環境学研究所(強制移動研究分野)研究員。京都三条ラジオカフェ(FM79.7MHz)にて、「難民問題を天気予報のように」をコンセプトにした日本初の難民問題専門情報番組「難民ナウ!」を制作。国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)と国内外で難民支援を行うNGOで構成するJ-FUN(Japan Forum for UNHCR and NGOs)のメンバーとして活動するほか、市民メディアの可能性について制作者の視点から講演活動を行っている。

座談会

2020年11月12日、地域の方々を迎えた発表会が行われました。その際、本プログラムに関心を持っておられた総合地球環境学研究所の阿部 健一先生をはじめとする研究員のみなさん総勢6名も見学に来てくださいました。

発表会終了後、近畿大学附属豊岡高等学校の先生方、豊岡市役所の担当者の方を交え、座談会を行いました。高校生の熱い発表に余韻が残っているなかでの、未来に向けた対話です。

参加者

総合地球環境学研究所(以下、地球研)

阿部 健一 先生 研究基盤国際センター・コミュニケーション部門

三村 豊 先生 研究基盤国際センター・コミュニケーション部門

※ そのほか、宗田 勝也先生、ダニエル・ナイルズ先生、ツェリン・オムン・シェルバさん(京都大学インターン生)も同席されました。

近畿大学附属豊岡高等学校(以下、近高)

吉田 武志 校長

中嶋 徹 進学探究コース・コース部長

石田 展一 先生(1年3組担任)

寺谷 信人 先生(1年4組担任)

豊岡市豊岡市 環境経済部 環境経済課 定住促進係

石田 依子 氏

一般社団法人ダンストーク

千代 その子

川那辺 香乃

※ 橋本麻希も同席。

川那辺 この座談会では、本プログラムの振り返りのためにこの場を設けました。自由な意見交換ができたと思っています。まずは、このプログラムに3年間関わっておられた中嶋先生からお話をお伺いしたいと思います。

中嶋 毎年、生徒達は本当にすごい力を持っていると感じます。高校生活の中で文化祭や体育祭などの行事でも、彼らのエネルギーを感じることはありますが、それ以外のところで、こうして生徒が大人に対して表現を見せ、発表後の交流を通して、彼らは一歩大人に成長すると実感しています。プロセスを組み立てていく時にはいろいろな苦勞がありますが、発表を見せてもらった時に達成感を感じます。

阿部 発表後にみんなで話をする時間があったのが、いいなと思いました。私もその中に混ざっていたのですが、高校生が積極的に話しかけてくれました。地域のアドバイザーと話すと生徒たちは達成感にあふれ場の空気が一体になっていると感じました。発表だけで終わらず、みんなで振り返る場を設けることが大切ですね。あの時間は

毎回設けておられるんですか？

中嶋 1年目は作品の完成度を高めることがメインとなり、地域との関わりが薄くてできませんでした。2年目はダンサーとの関わりをメインにし、アドバイザーには2年目から見に来ていただくようになりました。3年目は、アドバイザーに絶対観てもらおうことを目標に、地域と高校生がいかにかたくさん関われるかを念頭に置いてプログラムを組み立てていきました。

川那辺 今年度は、新型コロナウイルス感染症により学校も休校が続き、4月時点では外部講師を招いた授業は難しいと思われました。それでもこのプログラムを実施するとかかなり早い時期に判断してくださった校長先生にお話をお伺いします。本プログラムの感想を教えてください。

吉田 この話を聞いた当初は、地域にリサーチを行うというプロセスと最後のダンスがどう噛み合うのか疑問でした。アドバイザーの方々がお話されているところを見て、

地域教育の一環なのかなと思っていました。でもそれ以上に、この限られた短い時間でダンス作品を作ることは、将来社会に出た時に、きっと役に立つだろうと感じました。

川那辺 ワークショップを体験してみたいかがでしたか？

吉田 最初に体育館で生徒を集めて「今からダンスをします」って言っても、みんな動かなかったですよ。でも、その緊張を少しずつほぐしながら進めておられて、生徒たちの姿を見ていたらいつのまにか自分も動いていて感動しました。やっぱりその辺がうまく指導されていたんだと、さすがだなと感じています。

川那辺 次は担任の先生方に、生徒さんとプログラムに参加されるにあたって、気をつけておられたことなどお伺いしてもよろしいでしょうか。

石田(展) 私自身、初めて参加するプログラムなので先が見えませんでした。生徒も同じように考えていたので、どんな事をするのか分かる範囲で少しずつ話をしました。次のステップには何があるか、目的はなにか、それに向けてどういう風に取り組んでいったらいいか、段階的に伝えたことで、生徒たちは自分なりにイメージを膨らませながら取り組んでくれたと思います。また、地域でのリサーチからクリエイションまでに時間が空いたので、その間にリサーチしたことをまとめ、みんな話をする時間を取りました。

川那辺 今日作品をご覧になっていかがでしたか？

石田(展) 感動しました。私は今までダンスを「発表」という概念で捉えていました。「発表」というとポスターを作って皆に見てもらい、パワーポイントで資料を作るということが多いですが、今日みたいな感動はないと思います。今日のダンスで伝わるものは「発表」よりもっと多かった気がしています。映画館をテーマにしたダンスをみた人が「豊岡の映画館って、どこにあるんだろう」と興味を持てば、情報発信としても成功していますよね。ダンスって、地域のことを伝えるとても面白い方法なのかなと改めて興味を持ちました。

川那辺 ありがとうございます。寺谷先生はいかがですか？

寺谷 僕は、ワークショップ、リサーチ、クリエイションという3つの段階をどのようにつなげていくか、石田先生とも相談しながら取り組みました。阿部先生も言っておられましたが、私も発表が終わった後、その場にいた全ての人から、心の底から幸せやなという空気を感じま

した。それまでに生徒たちの中で揉めごとや前に進めないことなどいろんなドラマがありました。ああいう形で終わって良かったと思います。

川那辺 担任の先生方が、ダンサーたちがいないときにどんなことをされていたかお伺いしてもいいですか？

寺谷 まず、アドバイザーの方たちの話を聞いた後、現地へリサーチに行くまでに時間があつたので、アドバイザーから話を引き出すための質問を100個つくるワークを行いました。また、リサーチが終わってからクリエイションに入るまでに、生徒たちの関心をつないでおきたかったのと、千代さん達の助けになればと思い、参考になるダンス作品の映像をいくつか送ってもらいました。ある程度「ダンスってこういうものなんだ」と先に理解しておいたほうが、すぐにクリエイションに入れるのではと考えたためです。クリエイションの時には生徒たちも自信満々で、スムーズにダンスをつくっていたのではと思っています。

川那辺 どんな映像を提供されたんですか？

千代 固定概念に捉われてほしくなかったので映像を見せるべきか悩みましたが、あえて日本人ではない、出来るだけ高校生から遠い、でもどこか共通点がある映像を探そうと思いました。イギリスのティーンエイジャーたちで、ダンス経験のある子・ない子をごちゃ混ぜになって踊っているフェスティバルのドキュメンタリー映像と、様々なルーツをもつ子どもたちが地域を舞台に踊る映像作品、障がいをもつ女の子が男の人と一緒に踊っている映像作品の3つを紹介しました。

川那辺 私は、このプログラムはリサーチからクリエイションまでの過程が大きなポイントだと思います。地球研の皆さんは、この点についてどのような感想をお持ちになったか教えてください。

阿部 「メタモルフォーゼ(変態)」という言葉が頭のなかに浮かび上がりました。青虫が蛹になりそして蝶が生まれる劇的で摩訶不思議な変化です。リサーチからクリエイションという異質なものが結びついた過程に驚きました。リサーチについては、地域の人は高校生に語るべきものを必ず持っているのであまり心配していません。知りたいと思ったのはこのメタモルフォーゼがどのようにして起こったのかということです。それは、たくさんの表現手法がある中で、とりわけダンスだったからというのはあるかもしれません。

三村 私も彼らのリサーチとダンスが何故こんなにマッチしたのか気になっていました。私はコウノトリのダンスをつくったグループに話を聞いたんですが、豊岡市で暮らしてコウノトリを知っていた生徒と、豊岡市外で暮らしてあまりコウノトリを知らなかった生徒という異なるバックグラウンドを持つグループでした。生徒たちはこの取り組みを通して同じイメージを共有出来ていました。これは大きな成果ですね。リサーチ時に仲間とどう話し合いをして、何が大事だと気が付いたのか、そしてどうやって作品とつなげたのか、そうした過程がわかるアウトプットがあるといいですね。

川那辺 石田さんは豊岡市の職員として、このプログラムの担当をされています。昨年度はこのプログラムに高校生とともに体験してくださいました。ご自身の体験もふまえ、このプロジェクトをどうみておられますか？

石田(依) 昨年度は、まずはこの事業を理解しようと高校生とダンスをしたり話を聞いたり、積極的に関わるようにしました。最初は彼らもどうしたら良いかわからず、やらされている雰囲気があったのですが「自分達がこの場を盛り上げないと」と心境がガラッと変わり、熱い心でダンスと向き合うようになった瞬間がありました。本番はとても楽しそうに自分を表現していたところに心打たれ、いろんな人との関わりがあったから彼らの成長につながったと感じました。今年は本番しか参加できなかったのですが、ここに至るプロセスを想像しながら発表を見ていました。今年は地域の方と関わる時間が増え、アドバイザーという明確に見せたい人に向けて発表していたので、そういうところにも胸を打たれました。年々進化していると感じます。

阿部 今日は、市長も時間を割いて見に来てくれましたね。

石田(依) はい。これは移住・定住促進に関わる事業なので、これからも継続し支援していきたいと考えています。市としては、将来のUターンにつなげていくためには、学生のうちに地域の方達とつながりを持っておく方がいいのではないかという考えを持っています。結果がすぐに出ないところですが、生徒達の心の中に思い出が残るだけでも成果はあると捉え、サポートしています。

阿部 生徒は卒業後一旦は県外へ出ていきます。でも、いつかは帰りたいと思うようになるでしょう。生まれ育ったところですから。息の長い仕事ではあるけど、

Uターンにはこういった事業が1番確実な効果が見込めると思います。

川那辺 阿部先生が知っている中で、地域の方が関わっている教育プログラムはありますか。

阿部 地球研では、宮崎県と大分県で高校生と地域の人をむすびつける環境教育のプログラムを実施しています。高校生たちが地元の年配の方に農業や林業についてインタビューし、報告書にまとめる「聞き書き甲子園」という取り組みを参考にしました。その報告書が素晴らしいんです。「よくこんなことを聞いてきたな」と感激するんだけど、報告書を読む人は多くない。もったいないので、より多くの人に共有できる形がないかと考え、トヨタ財団の助成をいただいて、高校生がインタビューを基に自分たちの地域の未来についてシナリオを作って演劇作品として発表するようにしました。

川那辺 最近、研究者の方は調査の発表方法としてよくアートを使われていますね。三村さんは高知県でアーティストや高知大学の学生などと協働して、地域の人から聞いたことや調べたことをもとに歌と盆踊りをつくっておられました。三村さんは、どうして記録集や報告書にしなかったのでしょうか。

三村 阿部先生と同様、報告書は残るけど読む人はほとんどいない、時間をかけてつくったのに広く伝わらないと感じていました。高知では歌いながら楽しみながら、みんなで調べたことが語り継がれたらいいなと思いました。また、地域の人たちに関心をもってほしいという意図もありました。

川那辺 たしかに、地域の方に広く知っていただく方法として、アートはいいのかもしれないですね。

三村 そういえば、アドバイザーの加藤さんが「作品のなかで大名行列のシーンを学生たちが何にも言ってないのにやったんだよ」ってすごく喜んでいました。これって、加藤さんの思いやイメージが高校生たちに受け継がれて、出石の風景が大名行列とつながったのかなと思いました。

川那辺 私も、高校生たちがその地域の雰囲気やイメージを踊っていることが、すごく面白いなと感じたんですけども、高校生にはどんなことをアドバイスしておられたんですか？

寺谷 彼らには最初のワークショップの前に「誰かを喜ばせることを最終的な着地点にしよう」と言いました。

千代 今年は先生方とこの目標を共有できていたので、私も声のかけ方などを変えました。クリエイションでも、最初の1時間半をコンセプト作りにあて、そこで今回初めて生徒たちに「リサーチの中でみんなの心に1番残っていることはなんですか？」と質問をしました。出石の加藤さんのところに行ったチームは「今一番残っているのは加藤さんの人間性、優しさ」という答えが出てきました。それがコンセプトにあったから地域の雰囲気やイメージをもとにした作品が生まれたんだと思います。過去2年間は生徒たちに「出石そば」「だんじり祭り」など、前もってテーマを渡していました。でもそれだと彼らの表現が広がらず、もう一步先があるのではという気がしていました。今回このような目標を設定したことで、ダンスが人と人の言語化できない感情と感覚のコミュニケーションになると感じました。今日の発表でたくさんの方が涙し、喜んでくださったのを見て、それは確信に変わっています。

阿部 今話を聞いて、ようやく気づいたことがあります。ひとつは、演劇ではどうしても言葉に頼ってしまっていますが、ダンスでは言葉を封じることで逆に自由度を得ることができるということ。もうひとつは、このプログラムは高校生が対象だけど、実はもっと多くの方が影響を受けているということ。アドバイザーを務められた地域の方々も、高校生に語ることで自分と地域についてあらためて考え、自信と誇りを得ています。地域の人たちも高校生から力をもらっているというところは、もうちょっと強調してもいいかもしれません。

千代 近年この活動に興味を持ってくださっている方が増えてきたので驚いています。近高出身で、地域や高校生のために自分も協力したいと言ってくださる方が意外と多いんです。

川那辺 それは皆さんに入っていただけのようにできるといいですね(笑)

阿部 校長先生にお伺いしたいのですが、こういったプログラムの評価についてはどう考えておられるんでしょうか？「どういう効果があったか」と問われた時にどう対応されているのでしょうか？

吉田 このプログラムで重要視すべきことは個人の評価ではなく、学校の評価です。例えばアドバイザーの方々が今日の発表を見て帰られた後に「高校生達、すごく良かったよ」と周囲に言ってくださることが学校の評価に

つながっていくと思うんですね。先ほど石田さんから行政の移住・定住促進の話がありましたが、実はこれは自分の学校のためでもあります。学校としても一生懸命地域を盛り上げる。そしたら、生徒がUターンで戻ってきて、この学校を評価する大人が増え、学校もより盛り上がっていく。こうした長期的な展望は必要だと思います。

石田(依) 行政としても、すぐに結果が出ないというのは重々承知しています。でも、生徒たちの心には、絶対に残ると思うんですね。自分が高校生だったら、大学に入ってたまに地元に戻ってきたときに「あの人どうしてるかな」ってまた会いたくなると思います。

川那辺 千代さん、最後にいかがでしょうか。

千代 よく「他のまちでもやってみたら」と言われるんですが、できないんです。なぜなのかずっと考えていたんですけど、それは高校生が豊岡の各地域に行って、アドバイザーと出会って感動したことを私自身が共感できるからなんです。高校生たちが「竹野の海が印象に残った」「加藤さんがこんな人だった」って言っても、私が共感できなかったら、クリエイションの時にどう助けてあげているのか分からない。冒頭で阿部先生がおっしゃっていた、リサーチからクリエイションの際に起こるメタモルフオーゼの要素として、地域のことを知っているダンサーの存在は重要だと思います。昨年度、プログラムを支えてくれるダンサー側の体制が整い、今年度は担任の先生方との連携体制が整いつつあります。まだ手探りではありますが、豊岡で多くの人達との出会いを通して、3年目にしているんな要素が揃ってきたと思っています。

川那辺 そろそろ時間になりましたので、座談会はこれで終了とさせていただきます。次年度どうプログラムを組み立てていくのか、先生方やアドバイザーの方々とも相談しながら進めていき、石田さんはじめ行政の方には引き続きご協力いただければと思います。地球研のみなさんも、今回だけに限らずこれからもお力になっていただけたらと思います。ありがとうございました。

阿部 健一

総合地球環境学研究所・教授。東南アジア熱帯林で生態学調査を続け、その過程で環境問題の文化的・社会的側面に興味を持つ。現在の専門は環境人類学・相関地域研究。世界水フォーラムでユネスコの「水と文化多様性」セッションのコーディネーターや、国連環境計画の「世界子ども環境ポスターコンテスト」の審査員などを務める。



アーティストプロフィール



千代その子 (ちしろ・そのこ)

メインアーティスト *2018~2020年

滋賀県出身。3歳からバレエを始める。2004年に渡英、ランベールスクール卒業後はシチリア島のダンスカンパニーに所属。帰国後、バレエ講師兼フリーダンサーとして活動。“習うダンス”ではない誰でも参加できる身近なダンスの場づくりを目指して、城崎・京都を中心にダンスファシリテーターとしての活動を広げている。2018年3月、一般社団法人ダンストークを設立。

©igaki photo studio



渋谷陽菜 (しぶや・はるな)

サブアーティスト *2018年

ダンサー、ヨガインストラクターとして関西中心に活動している。2017-2019年、余越保子 構成/演出/映像/監修「shuffleyamamba」各地公演に共同振付、出演。また、香川県を拠点にダンスユニットEclogionを主宰。中條財団助成の元、高松市塩江美術館で作品「pb」を振付/出演。コミュニティダンスファシリテーターとしても活動している。

©bozzo



石田安俊 (いしやん)

サブアーティスト *2019年

1963年生まれ。2012年9月おやじダンスチーム「ロスホコス」のメンバーとして『オヤジノ秘密倶楽部』にて初舞台を踏む。その興奮が癖になり、シアター21フェス、Dance Complex、北陸Dance Festival、三陸国際芸術祭、Grow!、おどらば芸術祭等にロスホコスメンバーとして出演、時にはソロで踊る事も。



米澤百奈 (よねざわ・もな)

サブアーティスト *2019~2020年

振付家・ダンサー・舞台テクニカル。神戸市出身、宝塚市在住。NPO法人DANCE COX主催「国内ダンス留学@神戸」5期生修了。振付家・ダンサーとして関西を中心に活動中。高校ダンス部のコーチ、高齢者、障がいを持った子ども達、小学生とのダンスタイムのナビゲーターやアシスタントを務める他に舞台監督・音響・照明にも関わるなど舞台芸術の分野に置いて幅広く活動している。



出川晋 (でがわ・しん)

サブアーティスト *2020年

1986年島根県生まれ、京都府在住。京都精華大学芸術学部素材表現学科陶芸コース卒業。2006年から美術作家の井上信太に師事する。美術や舞台美術の在り方を学ぶ。日常生活の中での気づきや、自らの実体験を元に作品を制作。立体、写真、映像、パフォーマンス、インスタレーションなど、あらゆる手法を用いた表現でアプローチ。



谷垣優 (たにがき・ゆう)

アシスタント *2018~2020年

新潟県出身。3歳からモダンバレエを始める。阿部允子、内堀照子に師事し、モダンバレエ、コンテンポラリーダンスを習う傍らりゅーとぴあ(新潟市民芸術文化会館)主催のミュージカルに参加。一般社団法人ダンストーク設立メンバー。現在は城崎でピラティスの講師をしながら、STUDIO DANSTORKにて子ども向けコンテンポラリークラス等を担当している。

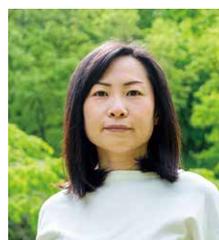


橋本麻希 (はしもと・まき)

コーディネーター *2018~2020年

神戸大学にて即興演奏や音楽療法を専攻。同大学国際文化科学研究科芸術文化論コース修了。修士論文は「日本における持続可能なコミュニティアートについての考察」。同年NPO法人プラッツに入社、城崎国際アートセンター(KIAC)開設準備事務局に勤務、2014年開館時よりコーディネーターとして勤務、事業企画運営に携わる。2021年よりKIAC共同ディレクター。一般社団法人ダンストーク設立メンバー。

©igaki photo studio



川那辺香乃 (かわなべ・かの)

リサーチャー *2020年

滋賀県出身・京都在住。アートコーディネーターとして子どもや障がい者とのアートワークショップを主に手がける。近年は地域研究者など他分野の専門家との協働が多く、エシカル消費、多文化理解など社会課題にアプローチしたワークショップのプログラムデザインや、アートプロジェクトのディレクションも行う。NPO法人子どもとアーティストの出会いプログラムディレクター。一般社団法人ダンストーク理事。

▼ 毎日新聞 2020年10月7日
「地域の魅力 ダンスで表現」出会いのダンスワークショップについて

地域の魅力 ダンスで表現

地域の資源を調べ、ダンスで表現する。そんな近大付属豊岡高（豊岡市、吉田武志校長）の進学探究コースの授業が注目されている。地元一般社団法人「ダンストーク」（千代その子代表）と同高の共催で1年生83人が取り組む。「地域の魅力を発見し、人々の思いに触れる」、「個としての意見を持ち、創造力豊かな人材を育てる」のが目的だ。古里への愛着を高めることで市外に進学してもUターン就職につなげる狙いもある。

【村瀬達男】

この授業は「ダンスを通じた探究活動」で、2018年に市環境経済課が同市城崎町を拠点にするダンストークを紹介して実現。地域と学校、行政、専門家が協働して高校生を育てる全国的にも珍しいプログラムだ。

3年目の今年は地域住民とのつながりを深めるため、10日間のプログラムを編成。旅館経営者や映画館スタッフ、住職や町並みガイドら10人に地域アドバイザーになってもらい、9月に4日間、学校で順に話を聞いた。10月はダンスを体験す

地元団体と近大付属豊岡高生ら

るワークショップ▽10班に分かれてのリサーチプランの作成▽リサーチ本番――を各1日ずつ計画。11月は各班が2日間かけてダンスを創作し、同月12日に発表する。昨年度は、ダンスをしながら、お菓子の神様・中嶋神社（同市三宅）の鳥居を男子が組み体的に表現し、女子がその下をくぐって参拝する作品▽城崎温泉の旅館従業員が宿泊客を迎える様子を表現した作品――などが披露された。

10月6日には千代さんとダンスの谷垣優さんが1年生を2クラスに分けて、県立但馬文教府体育館（同市妙楽寺）でワークショップを実施した。「かわいく飛ぶ」など6つの動きを取り入れたダンスを考え、発表した。「玄さんについて調べ、考えた人の発想力や町の文化をダンスで表現したい」などと話していた。

豊かな創造力育む



近大付属豊岡高の「ダンスを通じた探究活動」で指導する「ダンストーク」の千代その子代表（右端）
＝豊岡市妙楽寺の県立但馬文教府で

■地域に生きる人を創作ダンスで表現 近大付属豊岡高、ピアニストら10人取材

ツイート

シェア 56

印刷



千代その子さん（中央奥）とともに体を動かす生徒たち＝近畿大学付属豊岡高校

ダンスを通して地域を探求するユニークなプログラムに、近畿大学付属豊岡高校（兵庫県豊岡市戸牧）の生徒たちが取り組んでいる。地域づくりに励む大人たちに着想を得てダンス作品を創作する企画で、試行錯誤を重ねながら進めている。

◀ 神戸新聞

2020年11月10日

出合いのダンスワークショップについて



▼ 毎日新聞 2020年11月14日

「ダンスで地域の魅力アピール」 発表（パフォーマンス）について

ダンスで地域の魅力アピール

近大付属豊岡高

豊岡市の近大付属豊岡高（吉田武志校長）の進学探究コースの1年生83人による、ダンス創作授業の発表会が12日、同市妙楽寺の県立但馬文教府ふるさと交流館で開かれた。地域の人や自然や文化などを調べ、ダンスで表現する授業。生徒は10チームに分かれ、思い思いの振り付け

で豊岡の魅力アピールした。

同市の一般社団法人「ダンスストーク」（千代その子代表）と同高の共催で、Uターン就職を担当する市環境経済課も関わった。3年目の今年は市内の経営者や町並みガイドら10人の「地域アドバイザー」に学校で話を聞いたり、生徒

が職場に出向いたりして、ダンスの素材を探した。

発表会では、ピアニストの中嶋由紀さんが助言したチーム（6人）は、腕でウエーブを作り、音の響きを表した。NPO法人コウノトリ湿地ネットの佐竹節夫代表のチーム（5人）は、コウノトリの親とひなに分かれ、巣立ちを演じた。

城崎温泉の旅館「三木屋」の片岡大介社長のチーム（10人）は館内にある一枚板の大テーブルを組み体操のように再現。「竹野こども体験村」の服部恵山村長のチーム（11人）は人文字で「TAKEN O」を作った。

8色のスカーフを揺らして千手観音に成り切ったのは温泉寺（同市）の小川祐章住職のチーム（10人）。リーダーの清水愛舞さん（15）は「いろいろな意見をダンスの形にするのが難しかった」と話した。

【村瀬達男】



近大付属豊岡高のダンス創作授業の発表会で、「TAKEN O」の人文字を作る1年生

＝豊岡市妙楽寺の県立但馬文教府ふるさと交流館で

▼ 飛んでるローカル豊岡

2020年12月8日

豊岡市移住定住ポータルサイトに掲載
市民ライターによるプロジェクト密着取材



日本でも豊岡だけ！？高校1年生の「ダンスを通じた探究活動」に密着

📖 教育

🕒 2020.12.08



えりか

f Shareする

🐦 Tweetする



はじける笑顔がまぶしい高校1年生 2020年はコロナ禍で、いろんな1年生が誰も経験したことのない期待と不安でいっぱいだったんじゃないかな



おわりに

思春期でシャイ、しかも比較的小となしい本校の生徒たち。ダンスも全くの素人の生徒たちが、なぜ今回の探求学習中に大きく変貌し、自らの気持ちをダンスで表現し発表が出来るようにまでなったのか。今回ダンストークの皆さんのご指導によって、私たち教師には見えていなかった新たな生徒の力（能力）の引き出しが開かれたような気がしました。

技術的には決して切れのあるダンスではなくお遊戯程度。生徒たちも勿論、自分たちのダンスが上手いとも思っていません。しかしアドバイザーの方々への思い、チームとして創り上げたという責任感、それを多くの人に観てもらおう心地よさなど、普段の学校生活では体験出来ない達成感を味わったようです。

生徒の取り組み姿勢に変化が出たのは、興味を持ったアドバイザーのところへグループで取材に行った頃からです。アドバイザーの方から地域振興への取り組みを学びその心に触れ、このことを他人に伝えたいという気持ちが湧き出て来ました。しかし、ダンスの表現ではその方法が全く分からない生徒たちは、グループ内で少しずつ案を出し合い互いに確かめ合いながら創り上げていきました。

教室の座学だけでは、このような生徒の成長を見ることは出来ません。しかし、総合学習などでは主体性・協働性を身につけていく生徒の変化の過程やタイミングを知ることが出来ます。それがその後、教室での指導においても活かすことが出来るので、教師も生徒の観察をしつつ積極的に参加する姿勢が必要だと考えています。

近畿大学附属豊岡高校校長

吉田 武志

「ダンスを通じた探究活動」は2021年度も実施予定です。

今後も学校・地域の方々と連携し、高校生にとってさらに深い学びの場となるような取り組みを継続してまいります。

最後になりましたが、本プロジェクトにお力添えをいただいたすべての皆さまに、心より御礼申し上げます。

近畿大学附属豊岡高等学校・進学探究コース

ダンスを通じた探究活動

2018～2020年度 報告書

発行日 2021年6月

発行 一般社団法人ダンストーク
info@danstork.com
https://danstork.com

編集 川那辺香乃・千代その子・橋本麻希

写真・デザイン 田中友里絵

